

世界の中のアラブ

その歴史的役割

牟田口義郎

一、中東の「アーバーター（イロハ）」

「世界の中のアラブ」を論ずるには、彼らが住んでいる中東という地域の説明から始める必要があるでしょう。日本人の心理的地図ではいちばん遠いところにあるし、日本とは全く異質の世界であるからです。イロハのことを「アーバーター」とわざわざアラビア語にしたのもそのためで、二十八個あるアラビア語のアルファベットの最初の三文字、英語の「エイビージー」、フランス語の「アーベーター」に当たるのが「アーバーター」な

のです。アラビア語は英仏語のようなヨーロッパ語とは違い、右から左に書きます。

文字も書きかたも違えば、当然文化も違います。日本人がいちばん異文化体験をする地域、それは中東だ——と私は信じています。こちらの常識が通じないから参ってしまふ。恥ずかしいが、私の体験をまず紹介させて頂きましよう。

私は朝日新聞の中東特派員としてカイロに赴任しました。三十年以上も前のことです。これから世話になる情報省に挨拶に出掛けて手続きを済ませ、しばらく雑談し

ましたが、その時のことです。係官が質問しました。

——ところで、アサヒとはどんな意味ですか。「朝の太陽、つまり昇る太陽のことです」——それがどうして社名になるのだろう。「朝日は夕日と違って輝きがあります。威勢がいいじゃないですか。燃え広がる力、希望の象徴でもあるのです」——そうでしょうか。

会話はここで途切れ、しばらくして別のテーマに移りました。彼が腕組みをして疑問を呈した意味を理解したのはだいぶ経ってからのことです。

カイロでは一年のうち三六〇日晴れています。エジプトで一番暑いアスワンでは何年も雨が降らない。別図を見ればわかるように、例えば七月の平均最高温度はカイロでは三五・四度、アスワンでは実に四一・二度です。こういう世界にあつては、燃え広がる朝日は猛暑の予告で、断じて希望の象徴ではない。ましてや砂漠に行くキヤラバンにとっては、一日の苦痛の始まりの予告であり、彼らはひたすら涼しい夜の訪れを待つ。従って彼らにとって夜の近きを告げる夕日こそ、希望の象徴であるのです。一言付け加えれば、中東人にとって夜は美の代名

エジプトの都市と東京との温度の比較

(温度C)

都市名		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カイロ	最高	19.1	20.7	23.7	23.2	32.4	34.5	35.4	34.8	32.3	29.8	24.1	20.7
	最低	8.6	9.3	11.3	13.9	15.4	17.9	21.5	21.6	19.9	17.8	13.9	10.4
アスワン	最高	23.4	26.1	30.4	35.0	38.5	42.1	41.2	41.3	39.6	36.6	30.2	22.5
	最低	8.0	9.4	12.6	17.5	21.1	24.2	24.5	24.7	22.2	19.3	14.5	9.9
東京	最高	6.8	9.3	12.3	18.4	22.7	25.0	29.4	30.5	29.6	20.5	16.9	10.7
	最低	0.8	1.3	4.0	10.7	14.9	18.8	21.9	24.0	22.0	14.4	9.7	3.1

最低気温で見ると、夏はカイロの方が涼しいことがわかる。



詞であり、アラビア語で夜(ライラ)は女性名詞ですから、ライラは最もポピュラーな女性名であります。

雨が降らないからエジプトの山には草も木も生えておらず、茶色一色というのは私の常識を覆す驚きで、「エジプトはナイルのたまもの」というヘロドトスの言葉が初めて実感として捉えられました。そのナイルの水は濁っています。上流から運ばれてくる沃土のためで、雨の降らぬエジプトはこの泥水によって農耕文明を起こすことができたのです。日本は「山、緑にして水清く」が常識でしたが、エジプトは「山、茶色にして水濁る」なのであります。

風土上の大きな違いをもう一つ挙げれば、それは湿度です。日本人は夏は熱帯夜が続いてアゴを出しますが、その不快指数の元凶は湿度なのです。これに対し、中東は乾いていて湿度はほとんどゼロですから、夜はさらりとして涼しい。昼を地獄とすれば夜は天国です。そして、その昼でも、日陰に入ればけっこう涼しい。別図をもう一度見ればわかりますが、カイロの夏の平均最低温度は東京より低いのです。三年間カイロに住んで、私は熱帯

夜を感じたことはほとんどありませんでした。ドライな気候のおかげです。

このような中東に住む民族を言語別に分けると、イラン、トルコ、アラブの三つになる。イラン人が話すペルシア語はインド・ヨーロッパ語族に属します。イラン、イラク、トルコにまたがって住む少数民族のクルド人もこの語族に属しています。十字軍時代、聖地エルサレムを奪回したイスラームの英雄サラディン(正しくはサラッファディン)はクルド人でした。トルコ人が話すトルコ語は中央アジアが中心のアルタイ語族に属していて、日本語とも親類関係にあります。彼らが中東へ民族移動して来たのは十一世紀のことですから、古代オリエント世界以来の長い歴史から見れば、彼らは新参者です。

最後のアラブ人が話すアラビア語はセム語族に属し、ペルシア語と同じく、西アジア土着の言語です。中東の歴史に登場するアッカド人、バビロニア人、アッシリア人、アラム人、フェニキア人およびヘブライ人(ユダヤ人)は皆セム語族の出身です。従ってアラブ・イスラエル紛争はセム語族同士の争いといえます。現在、

セム語族に属している人々は、上述のうちアラブ人、ユダヤ人およびアフリカのエチオピア人だけです。

政治的に見ると、アラブ連盟に加盟しているアラブ国家、機関は二十一を数え、人口は約二億人に達しています。歴史的に見ると、アラブ人はセム語族の中では一番の後発民族ですが、現在ではそのチャンピオンになっています。

二、ムハンマドとイスラーム

歴史的には後発民族だったアラブが中東史の中央に登場するのは七世紀のことで、その主役を演じたのは一神教イスラームの創始者ムハンマド(マホメット、五七〇頃一六三二)であります。アラビア半島最大の商業都市メッカに生まれた彼は四十歳頃まで商業に従事していましたが、のち唯一神アッラーの啓示を受けて、預言者(神の言葉を伝える者)の道を歩み始めます。しかし、保守派の迫害のため六二二年、教友(同志)約七十人とともにメッカを脱出、メディナの市民に温かく迎えられました。この事件はヒジュラ(移住)と呼ばれ、イスラーム暦元

年を画することになります(日本では聖徳太子の没年)。

ヒジュラ後のムハンマドは宗教家・軍人・政治家という三つの特質を兼備した天才としての力量を遺憾なく発揮し、六三〇年にはメッカを征服、その二年後に没するまでに、アラビア半島をほぼ平定して、一つの教団国家を作り上げました。これを「ムハンマドのウンマ(共同体)」と呼び、神が下した真理が正しく具現された社会とされています。

ムハンマドの死後、教団の指導者は、合議制により、教友の中から選ばれました。アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリーの四人で、彼らカリフ(正しくはハリーフ)と呼ばれますが、これは「ムハンマドの」代理人、あるいは後継者」という意味で、この時代(六三二一六六二)は俗に「正統カリフの時代」と言われています。その後の状況を政治的に見ると、ウスマーンの一族のムアーウィヤがアリーとの権力闘争に勝って、シリアのダマスカスを都とする世襲的なウマイヤ朝を建て、七五〇年、ムハンマドの叔父を祖とするアブール・アッバースがこの王朝を滅ぼしてアッバース朝を樹立、二代目の

カリフのマンスールが、チグリス川のほとりに新都バグダードを建設しました。「千夜一夜物語」に象徴されるイスラーム文明がこの都を中心として花咲いたことはよく知られています。

このような時の流れに乗って、イスラーム教徒の数は飛躍的に増えて行きます。彼らをムスリムと呼びますが、これは「イスラームに帰依した者」という意味です。信徒として、彼らには次の五つの行為の実践が義務づけられます。これを五行と申します。第一は「信仰の告白」で、次の二行の章句を唱える。すなわち

アッラーのほかに神はなく

ムハンマドは神の使徒なり

第一の行によって、自分は一神教徒であることを明らかにし、第二行によって自分はユダヤ教徒やキリスト教徒ら他の一神教徒と違い、ムハンマドを預言者と信ずるムスリムであることを声明しているわけです。

五行の第二は「礼拝」すなわち一日に五回、メッカに向かつて祈ること。第三は「断食」で、イスラーム暦の九月の一ヵ月間、日の出から日没まで断食すること。第

四は「喜捨」で貧しき者に施すこと。そして最後は「巡礼」で、イスラーム暦の十二月に、メッカに巡礼することが奨励されています。

アラブの大征服は初代カリフの時代に開始されており、二代目のウマルの時にアラブ軍はビザンツ軍をシリヤから追放し、ササン朝ペルシアを滅ぼした上、エジプトを占領し、ウスマーンの時にはリビアの大部分を手に入れています。このような驚くべきアラブの膨張ぶりは、アリーとムアウィヤの戦いという内紛のため一時停滞しましたが、ウマイヤ朝の基礎が固まった八世紀に入ると、前代をはるかにしのぐ爆発力を以て征服が再開され、カリフのワリードの時代にはアラブ軍は西はスペインのほとんど全土を征服して南フランスに進出し、東はイランを越えて中央アジアに入り、西域を守る中国軍と対決するに至ります。アラブ帝国の版図が極限に達したのがこの頃です。これに対し、アッバース朝は受け身の時代で、中央の吸引力が弱まるに依じて辺境諸侯の独立が相次ぎ、地方分権化の傾向が強まって行きます。

アラブのこのような驚異的な発展の原因を「剣かコ

ランか」というイスラームの「狂信性」に求める説がはびこっていますが、これは全くの俗説にすぎないことを、皆さん、どうかこの機会に銘記していただきたい。あれは十字軍戦争に敗れたヨーロッパ人が広めた偏見であって、アラブ側の史書にそんなことは書いてない。イスラーム初期、ササン朝ペルシアやエジプトのビザンツ軍と戦った時も、彼らが提示したのは、二つではなく「改宗か、戦争か、それとも貢納か」の三つの選択肢であって、彼ら自身としては、相手が「貢納」を選ぶことを期待した。しかもその税率を相手より低くしている。エジプトに侵入したアラブ軍が人民から解放者として迎えられたのは、この現実感覚によるものでした。

アラブの軍隊は決して蛮族集団ではなかった。彼らはイスラームという太い背骨を持っていた。教祖のムハンマドは語っています。「信仰を押しつけてはならない」と。だから、イスラームは寛容の宗教であります。今日のアラブ世界に、イスラームより歴史の古い各派のキリスト教徒が少数派ながら健在なのはそのためです。著名人を二、三挙げれば、バース党の創始者でシリア人のミシエ

ル・アフラク、湾岸危機の際、活躍したイラクのタリク・アジーズ外相、国連の事務総長になったエジプト人のブトロス・ガリーらがそうで、またレバノンの大統領は歴代キリスト教徒であります。

イスラームが砂漠の宗教ではないこともこの際強調しておきましょう。では何か。イスラームは商人の宗教、都市宗教であります。現在最大のイスラーム国家はインドネシアですが、ここがイスラーム化したのはアッバース朝の滅亡後三百年も経ってからで、それはスパイス貿易を行うムスリム商人のおかげでした。イスラームが武力によって広まったのではない、一つの大きな証拠であります。

三、イスラームとアラブ

ここで視点を変え、イスラームとアラブについて再考してみます。現在イスラーム世界は東はフィリピン南部とインドネシアから西はモロッコ、モリタニアまで、北は中国西部や旧ソ連領の中央アジアから南はブラック・アフリカまで、という広大な地域に広がり、信徒の

数は七億、あるいは八億ともいわれ、キリスト教徒に次ぐ宗教集団を形成しています。従って、彼らの皮膚の色も言葉も多種多様であります。

メッカからかくも離れた遠隔の地へイスラームを伝えたのはアラブだけではなかった。前述のインドシナへの布教はアラブ、イラン、インドのムスリム商人であったし、中国西部や中央アジアへの布教はイラン系、トルコ系の地方政権の仕事でした。これでわかるのは、イスラームはアラブの独占宗教ではなくて普遍宗教、世界宗教であるということです。十六世紀初めから今世紀初めまでの四百年間を通じて、イスラーム世界のチャンピオンだったのはオスマン・トルコ帝国であつたし、それは同時に、アラブの衰亡の世紀でもありました。

このような世俗的環境のなかで、アラブは聖典『コーラン（正しくはクルアーン）』の存在により、精神的な指導権を確保しています。なぜならそれは彼らの言葉であるアラビア語で書かれており、翻訳が拒否されているため、ムスリムは聖典をアラビア語で読み、祈りはアラビア語で唱えなければならぬからです。ここがキリスト

教徒と聖書との関係と全く違うところであります。

ムスリムはムハンマドを、モーセやイエスと同じ預言者であるとして尊敬していますが、ムハンマドが彼らと違うところは、彼は神がこの世につかわした最後の預言者なのだと信じていることです。従って、ムハンマドを通じて神が語った言葉の集成である『コーラン』は、先発の『律法の書』や『福音書』の不備を補った完全な啓典であると考えられる。しかも、神は大使ガブリエルを介して、ムハンマドにアラビア語で語った。だからアラビア語は神の言葉であつて、これはアラブにとって無限の誇りの源泉となります。

コーランの翻訳拒否の根拠はここにあります。ただし、コーランは各国語に訳されていますね。日本語版でも二種類あるし、私は詳しい注付きの英語・アラビア語対訳本も持っています。しかし、ムスリムに言わせれば、それらはあくまでも参考書であつて、啓典ではないのです。このコーランは三代目のカリフ、ウスマーンの時代に彼のイニシアチブで編集されました。晩年の二十二年間にわたり、ムハンマドは神の啓示を受けた。彼を通じて

神が語った言葉を直接聞いた人々がまだ存命中に、正しく記録しておこう——というのがその趣旨です。こうしてコーランが出現すると、神に帰依することは、具体的にはコーランの言葉に従うことになります。こうしてコーランはムスリムの宗教生活ばかりでなく、日常生活のすべて、つまり彼らの思考と行動を規制するものとなっている。これがキリスト教の聖書との根本的な違いです。「イスラーム法」といわれる「シャリーア」の大前提になっているのがコーランなのです。

四、アラブとアラビア語

ここでは、アラブとアラビア語の特殊関係について述べます。

アラブはアラビア半島の原住民です。そのアラブが正統カリフの時代から征服事業に乗り出し、広大なアラブ帝国を建設したことはすでに述べたとおりです。このあいだに征服地へ移住したアラブの数は一〇〇万人以上に達したと言われています。しかし、征服された広大な地域の原住民の数の総計に比べればほんのひと握りにすぎ

ず、歴史が示すように、征服者は常に絶対的少数なのであります。ところが現在では、この征服地の相当部分がアラブ世界と呼ばれ、国連に加盟している独立国の数は二十にもなっています。このことからわかるのは、今日のアラブ世界に住むアラブ人は、セム語族に属した純粋のアラブ人ばかりではないということ、つまり、アラブ人とは膚の色の違いを超えた呼び名であることがわかります。

そこで、当然のことながら、次の質問が出てくるでしょう。

「アラブとは何か」

つまり、現代におけるアラブの定義であります。この問いに対し、いろいろな答えが出るでしょう。たとえば、①アラブとは、中東に住むイスラーム教徒のことである。②アラブとは、アラビア語を話すイスラーム教徒である。③アラブとは、アラビア語を日常語とする言語集団である。

以上の三つの答えのなかで、①は、中東にはイラン人、トルコ人という、言葉の違うイスラーム教徒がいるから

だめ。②は、前述したアフラク、アジーズ、ガリー各氏が外されてしまうからだめ。また、キリスト教徒が大統領のレバノン、アラブ連盟に加盟できないことになる。

正解は③であります。

ここで、アラブにとってのアラビア語の重要性が認識されるわけです。このことをわかりやすく説明するために、私の経験を申し上げます。私は中東の勉強を始めて間もなくカイロに滞在することになりましたが、その時の私の素朴な疑問は、「かつてピラミッドを建てた古代エジプト人はどこへ行ったか」というものでした。参考書には「アラブはセム人、古代エジプト人はハム人」と書いてある。それなのに今日では「エジプトはアラブ一の大国」と言われている。古代エジプト人は七世紀以降、アラブに征服され、追放され、消滅してしまったのだろうか？

答えは簡単でした。今日のエジプト人の大部分は「ナイル川の民」として古代エジプト人の子孫であり、変わったのは、彼らの日常語が古代エジプト語からアラビア

語という外来語に変わったことあります。ただしもう少し説明がいります。政治と宗教という複雑な要素が絡んでいるからです。

七世紀の半ば、アラブがエジプトに侵入したとき、そこはビザンツ帝国の領土であり、住民の大部分はコプト派のキリスト教徒だった。コプトとは、エジプトを指すギリシア語のアイギプトスの語頭が落ちて崩れたもので、彼らは文句なしに古代エジプト人の子孫でした。彼らが話すコプト語は、したがって、古代エジプト語の直系です。ところが、アラブの征服が恒久化し、彼らがイスラームとともにあるのを見ると、被征服者であるコプト人は征服者の言葉であるアラビア語に親しみ、イスラームに改宗して行く。また、ダマスカスやバグダードから派遣される戦士集団はコプト女性と結婚して子孫（イスラーム教徒）を増やす。さらにアラビア半島から紅海を渡り、南エジプトへ集団移住するアラブの数も増える——というわけで、九世紀の初めには、エジプトにおけるイスラーム教徒とキリスト教徒の数はほぼ同数になったと言われています。

よりはやさしかったと思われる。

ここで、征服について考えてみましょう。征服には武力が伴います。武力による征服。これが征服の第一段階です。次はこの征服を維持するために強力な政府ができます。政治的征服。これが第二段階で、ここまでは歴史のなかでよく見られる現象です。そして最後は征服者の言語による征服。すなわち文化的征服で、この実績をもつのは史上アラブだけです。ローマも、モンゴルも、そしてオスマン・トルコも為し遂げなかったことです。

ウマイヤ朝は初めはビザンツの言葉、すなわちギリシア語を併用していましたが、やがて政治の基盤が固まると、アラビア語を公用語とすることに決め、この制度はアッバース朝に引き継がれました。これが帝国内のアラビア化を促進したことはいうまでもありません。

しかし、古代オリエント文明が栄えた被征服地に住む人々にとっては、アラビア語は後進地域の言葉です。それなのに、後進言語がついに勝利を得たのは、アラブが武力によるだけの蛮族ではなく、イスラームという太い背骨を持っていたからであります。彼らは知的好奇心の

以後アラビア語とイスラーム教はますます普及し、十五世紀になると、コプト語はついに死語になってしまいました。つまり、コプト教徒はアラビア語で聖書を読み、アラビア語でお祈りするようになり、今日に至ってはいま。このような経緯を経て、アラビア語を日常語とするようになったエジプト人を、われわれは「ムスタアリバ」と呼びます。「アラブ化した人々」という意味です。コプト語の消滅。それはアラビア語の完全勝利を意味します。ここにおいて、エジプトの「アラブ化」が完成したのであり、以後のエジプト人は宗教の別なくアラブとなる。国連のガリー事務総長はコプト教徒のアラブであります。

五、アラビア語と文明

このような現象はイラクやシリアにも起こっています。彼らはアッシリア語、バビロニア語、アラム語など先祖の言葉を忘れ、征服者の言語であるアラビア語を日常語にしました。もっとも、これらの言語は皆セム系であったので、アラビア語への切替えは、エジプトの場合

旺盛な民族で、先進文明に対してほとんど拒絶反応を示しませんでした。

ムハンマドは次のように信徒を激励しています。

「ムスリムは男も女も、ゆりかごから墓場まで学べ。学びの道を行く者は、神の道へもっとも近づく者である」

「知識を求めよ、中国にも」

(中国への言及は、同国のムスリムの大きな誇りになっていたことをこの際申し上げておきましょう)。

こうして彼らムスリムは先発諸文明の精華を貪欲に吸収します。すなわち諸文献のアラビア語への翻訳でありまして、バグダードを中心とするこの「翻訳の世紀」は、第五代カリフ、ハールーン・アル・ラシード(在位七八六―八〇九)の時代に始まり、学芸の一大保護者、奨励者だったその息子、第七代アル・マアムーン(在位八一三―八三三)の時代に開花し、その甥で第十代のムタワッキル(在位八四七―八六二)の時代を頂点としました。

この時代はもちろんイスラーム諸学の興隆期でありましたが、それは同時にイスラーム文明の成立期であって、私が強調したいのは後者についてであります。この時代

に知的刺激を与えたのは圧倒的にギリシア諸学(ヘレニズムを含む)であり、学者・知識人たちはプラトン、アリストテレス、ピタゴラス、エピキュロスおよび新プラトン派のプロティノス、アポロニオス、医者ヒポクラテス、ガレノス、ディオスコリデス、さらにはユークリッド、アルキメデス、プトレマイオスらの著作を、ヨーロッパ人よりずっと前から知っていました。アラビア語への翻訳によってであります。

哲学、医学、天文学、占星術、錬金術(化学)、物理学、数学、音楽、地理学などの諸学がこれほど究められた世界は、当時ほかどこにもありませんでした。ペルシアやインドの科学書も翻訳されています。インド数字が導入され、アラビア数字として、現在われわれが使っている数字の基礎がつけられたことはよく知られています。ムスリムの学者たちは、ギリシア人が数世紀かけて仕上げた学芸を、一世紀足らずのうちに自分のものにしてしまったわけがあります。

翻ってヨーロッパを眺めてみましょう。バグダード、カイロ、コルドバというイスラーム世界の三大文化セン

ターで、学者たちが哲学や自然科学の探究に精を出していたところ、すなわち九世紀から十二世紀初頭にかけて、

このキリスト教世界では人民の九〇%以上が文盲だったと言われています。そこでこういうことが言えないでしようか。領土の軍事的、政治的征服が終わると、次は学者たちの出番となり、彼らは知的世界の征服に乗り出し、そして達成したと。その成果を、やがてヨーロッパ人は一心に学ぶわけです。アラビア語からラテン語に訳された書物を通して。自然科学を中心とするヨーロッパの十二世紀ルネサンスはこうして起こるのであります。

ここで視点を変え、この一大文明の形成者たちに光を当ててみますと、アジャム(非アラブ)の参加が多いという興味ある事実が浮かび上がります。アジャムの主力はイラン人です。そこで、「あの文明を築いた主役はアラブではなくわれわれの先祖だったから、アラブ文明ではなくイスラーム文明と呼ぶべきだ」とイラン人は申します。しかし、アル・マアムーンの治下で最大の業績を残した学者はネストリウス派のキリスト教徒フナインとその一族でした(イラクのアジーズ外相はこの宗派に属して

います)。こうなると話がややこしくなる。

そこで、彼らさまざまな学者たちをくぐる共通項がないものかと考えると、ただ一つあって、それはアラビア語なのであります。イラン人や中央アジアのムスリムもアラビア語で著述した。キリスト教徒もユダヤ教徒もアラビア語で書いた。要するに、文明形成への参加者がだれであれ、イスラーム世界が生んだのだからイスラーム文明、そしてそれはアラビア語で表現されたということです。そこで「アラビア文明と呼ぶべし」という学者もいますが、中世に限っていえば、その方がわかりやすいでしょう。

六、アラブの大義

このように、米大陸が発見される以前において、アラブが世界史に果たした役割は偉大なものがありました。しかし、米大陸が世界史に登場してくる十六世紀には、アラブ世界は一路衰退への道を歩んでいます。すなわち、三大文化センターの一つであったバグダードは一二五八年、モンゴル軍に破壊されてアッバース朝の滅亡を招き、

一四九二年、グラナダ王国が滅ぼされてスペインはキリスト教徒一色となり、一五二七年、カイロはオスマン帝国に征服されてしまうのです。こうしてアラブ世界の心臓であった西アジアとエジプトは、オスマン帝国の辺境になり下がってしまいました。

第一次大戦に際し、メッカの太守フセインはシリア、イラクの民族主義者・軍人と共闘して独立運動を起こし、これをイギリスが支援しました。有名な「アラブの反乱」です。しかし、戦争が終わってみると、西アジアのアラブ世界は英仏両国の支配下に組み込まれて、シリアは現在のシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナの四地域にこま切りにされ、しかもパレスチナはイギリスの後押しでシオニスト（ユダヤ人建国主義者）のものになると約束されたのです。一つになるべきアラブは、こうして英仏という帝国主義者によって細分化されてしまいました。「アラブのめざめ」——その前途には無限の障害が立ちまわります。

一方エジプトも苦難の道を歩きました。イギリスに首根っこを押さえられたのは一八八二年で、その束縛から

脱するには七十年もかかるのです。

第二次大戦が終わって間もなく、アラブ諸国は痛烈な一撃を受けます。イスラエルというシオニスト国家の独立宣言（一九四八年五月）と同時に起こったパレスチナ戦争（第一次中東戦争）で、参戦したアラブ五カ国（エジプト、レバノン、シリア、ヨルダン、イラク）は、生まれたばかりの小国イスラエルに惨敗してしまったからです。イスラエルの勝利の陰には、もちろん「かわいそうなユダヤ人」という国際世論の支持がありました。しかし、それだけではありません。アラブは団結せず、自分勝手に戦ったから負けたのです。

五年後エジプト革命を行ってアラブ世界のリーダーになったナセルは、パレスチナでの戦争を経験して初めて「アラブ世界がまったく一つのものに思えた」と語っています。

ここにおいて、「アラブの大義」がはっきりと姿を現します。「アラブの大義」とは、アラブがアイデンティティ、すなわち自己の存在を確立することであり、英仏を中心とする帝国主義に対する闘いがその手段となります

す。イスラエルはその帝国主義の産物にすぎません。しかもそのイスラエルは英仏と共謀してエジプトに攻め込んでいるのです（一九五六年、第二次中東戦争）。

しかし英仏の力はすでに衰えており、代わってアメリカがトルーマン宣言（一九四七年）によって中東に登場していました。冷戦構造のなかで、西側のリーダーとして、ペルシア湾の石油を東側に渡さないためです。この湾岸石油の埋蔵量は世界の三分の二に当たり、西欧の戦後経済の復興には必要不可欠のエネルギー源でした。このためサウジアラビアを筆頭とする保守派の産油国はアメリカに頼り、エジプトなど反帝国主義勢力はソビエトに頼って「アラブは二つ」という状況が生まれ、彼らは「反イスラエル」という一線で辛うじてまとまっていた。

このような国際関係を乗り越えてアラブが一つとなり、西側世界に一大衝撃を与えたのは第四次中東戦争（一九七三年）の時でありました。これは石油戦略、あるいは石油危機として、われわれの記憶に刻み込まれています。この時アラブ産油国はイスラエルと戦うエジプト、

シリアを支援するため石油を武器に代え、「パレスチナ人の失われた権利が回復するまでこの戦略を行使する」と宣言、西側世界（日本を含む）を深刻な経済危機に陥れました。アラブの力がこれほど世界で認識されたことは現代史上初めてのことであります。

この戦争で明らかになったことの一つは「パレスチナ人の復権」がアラブの共通目標、すなわち「アラブの大義」と同義語であるということです。アラブ世界は反帝国競争の結果、二十に分裂はしたがとにかく独立している。しかしパレスチナ人だけが、イスラエルの存在により、基本的人権の行使を妨げられているのです。このためアラブはPLO（パレスチナ解放機関、一九六四年創設）を、パレスチナ人を代表する唯一正統な政治団体と認め、国連の準加盟国（オブザーバー）にすることに成功しました（一九七四年）。

「パレスチナ人の復権」という表現には新しい意味が込められています。これはアラブ・イスラエル紛争史上初めて現れた理念で、武力によらず、話し合いによってその実現を図るというものです。一時はうるさかったイ

スラエル抹殺論は、今や時代遅れになっています。

イスラエルはパレスチナ人の復権を認めればよいのです。独立国家という形でか、それとも自治政府という形によってか。それは当面はわかりませんが、とにかくイスラエルとPLOがテールブルについて話し合い、PLOの納得できる結果が出れば、アラブ諸国が、最強硬派も含め、それを認めることは間違いありません。そして、この会談の実現のためには、イスラエルのスポンサー役であるアメリカがイニシアチブをとらなければならぬでしょう。「アメリカはPLOと話し合え」——これは第四次中東戦争以来の私の持論であります。

追記

現在、冷戦は過去のものとなり、「一極時代」が到来して、世界におけるアメリカの役割はいちじるしく増大しています。ソビエトとユーゴの崩壊により、ブッシュ米大統領が唱えた「世界新秩序」の構想も不透明の度を増すばかりで、「世界無秩序」の声さえ聞こえます。そのような国際環境のなかで考えると、世界最長の地域紛

争という記録をもつアラブ・イスラエル紛争は「パレスチナ人の復権」をメドに、政治解決への明るい見通しが立っています。

一九九二年六月のイスラエル総選挙では十五年ぶりに労働党が勝ち、対米協調派のラビン政権が誕生しました。同政権はパレスチナ問題の政治的解決に積極的な姿勢を取り始めています。この点から見れば、アメリカのとるべき世界政策のうち、パレスチナ問題は優先順位のトップにあるといえるでしょう。PLOの立場をどのようにアメリカに理解させるか。世界の平和に果たすべきアラブの役割はますます大きくなって行くだろう。これが私の結論であります。

(一九九二年八月)

(むたぐち よしろう・東洋英和女学院大学教授)

(編集部より) 本稿は一九九一年六月二十七日に行われた講演内容を敷衍し、かつ補筆したものです。